



日本救急救命学会

JSELS

newsletter

Japanese Society for emergency life-saving

第4号

令和4年3月1日

一般社団法人 日本救急救命学会 事務所 〒164-0001 東京都 中野区中野2-2-3 (株)へるす出版内
E-mail:info@jsels.jp URL:https://jsels.com

学会名称変更にかけて

日本救急救命学会理事長
脇田 佳典



平素は学会活動に格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、ご存知のとおり2021年10月1日に救急救命士法が改正されたことから病院内で救急救命士が業務を行うことが可能となりました。救急救命士の活躍の場が病院前に限らなくなったことを受けて、当学会では理事会から総務運営委員会へ審議依頼を行い、結果、学会の名称変更を行う事と答申を頂きました。

かねてより、名称変更の議論はされてきたのですが、これを機に準備を加速させ、12月15日に臨時理事会において名称変更について審議し、変更を行うことで可決、12月18日に評議員会総会において全会一致で可決されました。

これより、本学会の名称を「日本病院前救急救命学会」から「日本救急救命学会」とし、英文表記を「Japanese Society for prehospital emergency life-saving(略称:JSPELS)」から「Japanese Society for emergency life-saving(略称:JSELS)」とすることを会員および関係機関の皆様にご報告いたします。

本学会は病院前における学問の構築を目標としておりました。しかし、医療機関で働く救急救命士の現場も、救急現場学として学問を構築する必要があるのではないかと従前より考えておりました。これまで、その部分をうまく表現できずにいました。また当学会への参加も躊躇されていた方もおいでになるのではと推察されます。

今後は、そのような障壁は取り除き、すべての救急救命士の皆様と救急救命士による学問の構築に向け、自律のため力を合わせて進んでいく所存でございます。

今後とも引き続きご指導ご鞭撻賜りますようお願いいたします。

会員募集中

名称 **一般社団法人日本救急救命学会**

設立年月日 2014年5月30日

主な活動

- ・ 学術集会の開催
- ・ 会員向けワークショップの開催
- ・ 救急救命士及び病院前救急医療に関する調査・研究、教育と普及・啓発
- ・ 会員相互の情報交換及び機関誌の刊行
- ・ 国内外における関係諸団体との交流
 - ・ 日本臨床救急医学会メディカルコントロール検討委員会への委員の派遣
 - ・ JPTEC協議会への役員の派遣
 - ・ 病院前救護統括体制認定機構への理事の派遣など

会員区分

- ①正会員本法人の目的に賛同し、所定の入会手続きにより入会した救急救命士の資格を有する個人。
- ②賛助会員本法人の目的に賛同し、事業を賛助するために、所定の入会手続きにより入会した医師、看護師などの医療職種、または救急隊員資格を有する個人。

③名誉会員本法人の発展に特に功労のあった者で、理事会より推薦され、評議員会の承認を得た個人。

④協賛会員本法人の目的に賛同し、事業を支援するために、所定の入会手続きにより入会した個人又は団体。

会員登録

入会金5,000円 年会費5,000円

(協賛会員団体50,000円/口)

会員登録は専用フォームからお申込みください。ご登録頂いた住所に振込用紙を送付致しますので、入会金・年会費をお振り込み下さい。

お振込が確認できた段階で会員登録致します。

会員登録作業は月2回のため、お待たせすることがございます。また、お振込確認後の会員登録が完了した旨の連絡は致しませんので、ご了承下さいますようお願い申し上げます。

日本救急救命学会
会員申し込み専用フォーム



● 中川 貴仁 日本救急救命学会理事

先日、NHK地上波にて「エマージェンシーコール～緊急通報指令室～」が放映されました。本学会員の皆様も多数の方々をご覧になったのではないのでしょうか。この番組は、119番通報の受ける消防指令センターにテレビカメラが密着し、指令管制員と通報者の会話のやりとりのみで構成される番組であります。諸外国では人気のシリーズ番組のようであり、今回我が国では初放映となりました。今回この番組の舞台となったのは、横浜市消防局消防司令センターです。緊迫した一刻の猶予のない状況が無駄のない聴き取りによって瞬時に判断し、気が動転している通報者に優しく的確に口頭指導を行い、救急隊到着まで電話口の「声」だけで寄り添いサポートする一連の流れは、救急救命士であったとしても誰しもがそう簡単にできることではない、まさにプロフェッショナルの一端を垣間見た瞬間でありました。



エマージェンシーコール～緊急通報指令室～ ©NHK

119番通報や救急現場は、「社会の縮図」とよく例えられます。今、我が国が抱えている高齢者単身世帯からの通報や、在留外国人世帯からの通報等の諸課題も取り上げられました。少し古い話題となりますが、2018(平成30)年に日本学術会議社会学委員会社会福祉学分会は、「福祉署(仮称)」の設置を提言していました。消防署などと同様の位置付けとし、各市町村に専門職(保健師や社会福祉士、介護支援専門員等)が公務員として一定の公権力を持って保健所、児童相談所や市町村社会福祉行政担当課の縦割りを排し、社会福祉行政の再編成及び効率化し、より機動力を持って対応できる組織をと提言されたものでありました。番組内でもベテラン指令管制員の方が仰っていましたが、通報の中には社会福祉的な要素が多く占めるように

なっており、消防機関と社会福祉行政を担う機関とのより一層の協働連携が求められる時代となってきたものと思います。

私は救急救命士を養成する大学に勤務していることから、日常的に学生にはコミュニケーションの重要性について講義や演習を通じて特に伝えていきます。最も基本的なコミュニケーションの一つとして挙げられるのは「話す」ことであると思います。ここ津軽地域には難解で有名な「津軽弁」という方言もありますから、より一層のコミュニケーションが重要となってくることは言うまでもありません。私のように他県出身者だとこの場合は、非言語的コミュニケーションを多用して乗り切ることになるのですが…。

本題から逸れましたが、ただ「話す」＝「声を出す」ではなく、「抑揚」だったり「速さ」だったり「強弱」だったり、「話し方」や「伝え方」を相手に合わせて変えることが重要となります。

縁があって、2年前から弘前市のコミュニティラジオ局でパーソナリティを務めています。月1回60分生放送です。テーマやトークの合間に入れる音楽さらには時間構成など、全て毎回自分で決める必要があります。せっかく救急救命士がパーソナリティですから、夏には熱中症予防、冬にはヒートショック対策や餅による窒息予防策などの応急手当普及啓発に関することから、消防職員採用試験に関すること、防災や減災に関することなど、救急救命士ならではの話題を必ず盛り込むようにしています。また、大学紹介も兼ねて様々な分野の同僚教員にもゲスト出演してもらっています。

わかりやすく伝えるにはどのようにしたらいいのか、言葉選びは特に慎重になります。また、テレビと違い映像ですぐに理解できないことがないので、テレビでは一瞬のことで、ラジオではたくさんの言葉を使って説明する必要があります。しかも長々と説明しては、ラジオを聴いている方には伝わりません。もちろん専門的な医療用語やいわゆる「お役所言葉」は使わないようにしていますし、ゲストとトークを繰り広げる際には、段々盛り上がってくると早口になってしまったりと生放送ですので、失敗は許されない中でのプレッシャーを感じながら放送しています。毎回放送を録音して、聴き直しては反省し次回に活かすようにしています。でも、「話す」ことがとても好きなのこともあり、毎月楽しく放送しています。

先の指令管制員もラジオパーソナリティも自分の「声」だけを武器に、大事なことを伝えたり訊きだしたりと、共通して言えることは相手が「声」を聴いて理解できているのが最も大事なこととなります。先入観を排しながらも相手の背景を想像して、いかに「声」に反映できるかがカギと言えるのかもしれませんが。私が新人救急救命士の頃に先輩救急救命士から、「我々が救急現場で最初にできることは声かけだ。ただ、声をかけるのではない、傷病者のことを想い、言葉を選び、要点を捉えながら声のかけ方を考えるように。」と教わったのを覚えています。20年近く前の出来事であっても、現在でも学生教育の場においても通用する大事なことではないでしょうか。

今、救急救命士を取り巻く環境は激変していると言えます。社会から求められている役割も年々増加しています。当然、近い将来においても実施できる医療行為も拡大していくと思われ、知識や技術のブラッシュアップは救急救命士を辞めるその日まで続くことと思います。でも、いくら実施可能な医療行為が増えようとも、我々が様々な場面で発する「声」で助けを求めている方はもちろん、家族や周りの方をも安心したり不安が少しでも軽減できるような、そんな救急救命士でありたいと思っています。



オンエアの様子 筆者は向かって右側

筆頭著者氏名および所属先：中川 貴仁

弘前医療福祉大学短期大学部救急救命学科

弘前医療福祉大学短期大学部のご紹介

今回は弘前医療福祉大学短期大学部救急救命学科の中側様、若松様にご寄稿いただきました。ありがとうございました。

弘前医療福祉大学短期大学部は、弘前城東学園の建学の理念である「ホスピタリティー精神(厚遇と慈愛)」を基盤とし、未来を担う人間性豊かな質の高い専門資格を有する人材を育成することで地域社会と国民の福祉に貢献しています。(オフィシャルサイトより引用)

3年制の救急救命学科でわが国、短期大学初となる救急救命士養成校とのことです。

校内には体育館ほどの大きさがあるU S A R 実習棟の中に模擬半壊家屋を設置し、さまざまな状況を設定した救命・救助技術を訓練します。

また、高規格救急車や、なんと救護用ヘリコプターを常設しており、傷病者の受け渡し(ランデブー)訓練を行います。



弘前医療福祉大学
弘前医療福祉大学短期大学部

<https://www.hirosakiuhw.jp/>

消防を退職してから4年が過ぎようとしています、在職30年で一番の財産は「人との繋がり」だと年々強く感じます。2008年、偶然にも当時のNPO法人JPR（日本国際救急救助技術支援会）理事長、正井潔氏に神戸でお会いし入会のお誘いを受けてから、私は2010年からカンボジア王国、中南米バルバドス国、ラオス人民民主共和国、そして旧ソ連からの独立国モルドバ共和国に対し、JPRの一員として消防・救急・救助技術の支援を行ってきました。

カンボジアやラオスは急速な経済成長によって交通量が激増しており、特に東南アジアでバイク台数あたりの事故死亡者数が最も多いのがカンボジアと言われています。ラオスは中古車の輸入に規制があるためカンボジアほどではありませんが、両国は、まさしく我が国の昭和30年から45年当時の「交通戦争」をも上回る劣悪な状況下です。

バルバドスはカリブ海で最東端に位置する島国（アフリカに近い）で、隣国アメリカのほかイギリスを中心に欧州諸国とも友好関係維持しており、非常に治安の良い観光立国でした。モルドバも旧ソ連から独立して30年を迎えたばかりで政情は安定しませんが、東欧文化を感じる街並みや自然が美しい国でした。



Fig.1 カンボジア・日本友好防災学校（引用；JPR Facebookページ）

比較してみると、東南アジア諸国の医療事情の悪さや防災機関の未熟さが目立ちますが、どの国に行っても共通して感じるのは「柔軟性」と「スピード感」です。勿論、追いかける状態ですから、お手本となる先進国の模倣をすれば良いという事情もあるでしょう。しかし、例えば東欧のモルドバでは、日本の私たちがイメージしていたパラメディック方式、ドクターカー

方式といった概念や垣根も「病院前・病院内」もなく、一つの「救急事案」として医師とパラメディックが介在します。そのシステムは実に合理的で機能的だという印象を受けます。



Fig.2 バルバドス消防

また東南アジア諸国も同様に、交通事故や外傷が活動のメインである影響が大きいので、「救急隊」、「救助隊」といった概念ではなく「RESCUE」という一言で語られます。そしてこれらが程度の差こそあれ、国の内務省や保健省といった組織直轄で行われていますが、これが「柔軟性」や「スピード感」を生んでいる原因かも知れません。

まだまだ前記したカンボジアやラオスの救急医療は未熟でシステムも脆弱ですが、人口減少と地方の過疎化が進む日本において、現状の消防組織の地賄方式による救急システムは、今後も本当に有効なのでしょうか。いつまでも、彼等が途上国で日本が先進国だと言えるのか少し不安になります。

2021年10月1日付けで改正救急救命士法が施行され、本学会も「病院前」という表現がなくなりました。これを機に「病院前・病院内」や「官・民」の枠を超えて救急医療が発展していくことを望みます。そして私もその歯車の一つとして、本学会で活動したいと考えております。

筆頭著者氏名および所属先：若松 淳

弘前医療福祉大学短期大学部救急救命学科

救急救命士ジャーナル 第4号のお知らせ

日本病院前救急救命学会準機関誌「救急救命士ジャーナル」第4号のお知らせです。今号も皆様が興味をもっていただける特集や記事を精力的に掲載いたしました。当面、学会員には無料配布を予定しております。是非とも、この機会にご入会くださいましてジャーナルをその手に取って頂きたいと思っております。会員皆様からの論文も随時受け付けております。掲載される論文の質と学会誌としての信頼性を保つよう、査読者による査読システムを採用しております。これまで投稿先がなく、半ばあきらめていた救急救命士の方々も胸を張って投稿いただけます。詳しくは救急救命士ジャーナル投稿規定、またはオフィシャルサイトをご覧ください。

一般社団法人
日本救急救命学会準機関誌
Journal for Emergency Life-Saving Technician

救急救命士が作る
救急救命士のための



救急救命士 ジャーナル

年4回発行
編集発行人/佐藤枢 発行所/株式会社へるす出版

第4号の目次 (予定)

- ◆救急救命士 最前線；特集「様々な職場で活躍する指導的立場の救急救命士」
- ◆進取果敢；全国各地、新たな取り組みを紹介！
今回はプレアライバルコールについて特集します
- ◆救急救命士図鑑；いろんな救急救命士をピックアップ 海上保安官の救急救命士
- ◆巨人の肩の上に立つ；救急救命士が読み解く海外の最新論文

- ◆経験伝承；『病院前救護』という分野は存在するのか？
- ◆外傷病院前救護の現状 from JPTEC；外傷傷病者に対する輸液
- ◆学会員の声
- ◆投稿論文

2022年3月20日発行 定価1,650円(本体1,500円+税)
へるす出版のサイトからご購入いただけます

救急救命士ジャーナル投稿論文を振り返る

救急救命士ジャーナル第3号には投稿論文「一柳保：119番通報や携帯電話の操作に関する習熟度調査結果に基づく啓発活動の必要性」が掲載されました。内容は次のとおりです。

---*---*---

CPAの119番通報を受けた通信指令員は通報者や付近の人に対して、心肺蘇生の口頭指導を行う。その際に、通報した電話のスピーカー機能を作動させて両手を使えるようにしてからサポートを行っている。しかし、実際の通報時にスピーカー切り替えができたのは28.6%と低値で、普段の電話機の操作においても、成功したのは62%となっており、特にガラケーの所有者では8割を超える人がスピーカーに切り替えることができなかった。この結果から、消防が行う救命講習のカリキュラムに、携帯電話から119番をダイヤル(実際は117番の時報)してスピーカーにするまでの手順を、受講生が所持する機種で確認してもらう内容を追加した。さらに、実技演習では口頭指導を受けるような状況設定で指導員が背後から手技をサポートするようなスタイルで行った。受講生からも口頭指導というシステムを知るきっかけとなり、忘れかけた知識や技術を補填してもらえることで応急手当て実施への不安を払拭できることが期待できた。

---*---*---

電話機のスピーカー機能を作動させることは、ガイ

ドライン2015のときにはすでに記載があり、これに基づき口頭指導要領が作られています。通信指令員の経験がある方は、このスピーカー機能の作動がネックになることが少なくないことが印象としてあると思います。また、このつまづきが後の胸骨圧迫開始時間に影響することも肌で感じているはずですが。▷応急手当講習は心肺蘇生とAEDの操作を重点的に指導し、それらが救急隊が到着するまで1人でできるというのを到達目標として展開してきました。また、少し発展的な指導員であれば、傷病者が命の危険にさらされている、いわゆる“気づき”の部分に着目して、全身のけいれん時は反応がないということ、しゃくりあげるような呼吸は普段通りの呼吸じゃないことなど、重症度緊急度判断にフォーカスして指導されている方もおられます。▷心肺蘇生の技術は3か月を境に徐々に失われていくことが調査研究で判明しています。ただ、それは完全に失われる技術ではなく、ある程度サポートを添えることで補充することができる知識の喪失です。つまり、口頭指導というサポートを得ることでCPAの判断や胸骨圧迫の手技が行えるなら、そこに行きつくまでのプロセスにもっと着目して指導してはどうかという提案です。もちろん、これには学校教育や自動車学校での取り組みで心肺蘇生やAEDの手技が普及されているからこそ、消防が割り切って指導できるということも言えます。(T.Ichiryu)

救急救命士ジャーナル投稿規定

1. 名称

名称は、救急救命士ジャーナルとし、本誌の英文名は「Journal for Emergency Life-Saving Technician」とする。

2. 目的

本誌は日本救急救命学会の準機関誌であり、救急救命学の進歩と発展に寄与することを目的とする。

3. 投稿資格

- 1) 筆頭著者は本学会の会員に限る。ただし、編集委員会が寄稿を依頼した場合は、その限りではない。著者の人数は10名以内とする。
- 2) 投稿論文は二重投稿ではない旨を明記した「誓約書」に必要事項を記入して添付すること。

4. 論文の受付

論文の受付には以下の要綱を満たす必要がある。

- 1) 著者の人数が10名以内である。
- 2) 8. 文章執筆要領に則した記述である。
- 3) 投稿論文は二重投稿ではない旨を明記した「誓約書」及び、申告するCOIがある場合はCOI 申告書を提出している。

5. 論文の採否

投稿論文の採否は編集委員を含む3名で査読後、編集委員会の審査によって決定し、採用となった場合はその日をもって受理年月日とする。

6. 投稿内容

- 1) 本誌への掲載は救急救命士及び救急救命の領域の論文とする。
- 2) 論文は国内で未発表のものに限り、二重投稿は禁止する。ただし、海外で日本語以外の言語で発表した論文を日本語で記載しなおした場合は二重投稿とはみなさないが、著作権の保有者に使用許諾を得ていること、及びその場合の論文カテゴリは、「資料」とし最初の論文の掲載誌を明記する。

7. 投稿論文の種類

論文の種類は、総説、原著、調査・報告、症例・事例報告、資料・その他とする。

1) 総説

多面的に国内外の知見を集め、文献調査に基づき、総合的に学問的状况を分析・概説し、考察したもの。

2) 原著

論文の体裁(目的・対象と方法・結果・考察)が整っており、研究内容に新規性、独創性があり、方法の信頼性、妥当性が高く、その知見が論理的に示されており、学術的価値の高いもの。

3) 調査・報告

独自に行った調査等の結果をまとめ、報告並びに解説したもの。

4) 症例・事例報告

単独または複数の症例や事例をまとめ、考察を加えたもの。

5) 資料・その他

編集委員会が適当と認めたもの。

8. 文章執筆要領

- 1) 原稿はパソコンの文書作成ソフト（Microsoft® wordなど）にて作成し、A4判横書きで、40字×30行で行ページ設定する。
- 2) 現代仮名遣いに従い、医学用語を除き常用漢字を用いる。
- 3) 度量衡の単位はCGS単位を用いる。
- 4) 統計処理を行った時は、統計学的検定法を明記する。
- 5) しばしば繰り返される語は略語を用いてよいが、初出の時は完全な用語を用い、以下に略語を使用することを明記する。(例) 心肺停止 (cardiopulmonary arrest、以下CPAと略す)
- 6) 図、表、写真の引用は該当文章の末尾とする。
- 7) 原著の本文は、はじめに、目的、方法、結果、考察、結論の順位に記述する。
- 8) 症例・事例報告の本文は、はじめに、症例、考察、(結論)の順に記述する。
- 9) 論文の本文には頁数を付す。
- 10) ランニングタイトルは20字以内とする。

9. 和文要旨

400字以内の和文要旨をつける。

10. 索引用語

原則として日本語とし、総説、原著、調査・報告は5個以内とする。索引から目的の論文を確実に検索できるようなものを選択する。

11. 字数制限

原稿は本文、図表、写真、文献を含めて12,000字以内とする。図、表、写真は縦5cm×横7cmに縮小印刷が可能なもの1点を400字相当と換算する。

12. 図、表、写真

- 1) 図、表、写真には図1、表1、写真1などそれぞれに通し番号をつけ、日本語でタイトルを表記する。
- 2) 写真は解像度が高いものが望ましい。
- 3) 本文内に図、表、写真、の挿入箇所を示したうえで、用紙1枚に1点とし、「図、表、写真番号、」「タイトル」「説明文」を記載する。
- 4) 元データがある場合は提出する。
- 5) 図、表、写真等を引用・転載する場合は、著者自身が著作権者の了解を得た上で、出所を明記する。
- 6) 図表は原則としてモノクロとする。カラーでの掲載を希望する場合はカラー掲載料を著者が負担する。

救急救命士ジャーナル投稿規定

13. 文献

- 1) 文献は本文中に上肩付した引用番号順に配列し、20編程度とする。
- 2) 著者は筆頭著者から3名までは明記し、それ以上は「他」または「et al」とする。
- 3) 雑誌名略記は医学中央雑誌刊行会・医学中央雑誌収載誌目録略名表及びIndex Medicusに準ずる。

4) 文献記載例

<雑誌>

引用番号) 著者名: 題名, 雑誌名 発行西暦年;
巻: 頁-頁.

- 1) 片山祐介, 北村哲久, 清原康介, 他: 救急電話相談での緊急度判定で緊急度が低かった救急車出動事例の検討. 日臨救急医学会誌 2018; 21: 697-703.

- 2) Kinoshi T, Tanaka S, Sagisaka R, et al: Mobile Automated External Defibrillator Response System during Road Races. N Engl J Med 2018; 379: 488-489.

<単行本>

引用番号) 著者名: 分担項目題名, 編者名, 書名.
(巻). (版). 発行所, 発行地, 西暦年, p頁-頁.

- 1) 鶴飼卓: 阪神・淡路大震災. 鶴飼卓他編. 事例から学ぶ災害医療. 南江堂, 東京, 1995, pp35-48.

<WEB サイト>

引用番号) サイト機関: ページ名.(改行)URL(最終アクセス日: yy.mm.dd)

- 1) 総務省消防庁:平成30年度版救急救助の現況.
<https://www.fdma.go.jp/publication/rescue/post7.html>
(アクセス日: 2020.1.26)

14. 倫理規定

- 1) 投稿論文のなかで、臨床に関わるものにおいては、傷病者や被験者ならびに特定の個人の人権を損なうことのないよう、必要に応じて倫理委員会による審査を得るなどして、十分配慮されたものでなければならない。
- 2) 個人が特定される年月日などの記載は臨床経過を知るうえでの必要最小限にとどめ、プライバシー保護に留意すること。
- 3) 実験動物に関わるものにおいては、動物愛護の面に十分配慮されたものでなければならず、必要に応じてその旨を記載する。

15. COI (利益相反) の開示

全著者の投稿内容に関連する企業や営利を目的とした団体からの資金援助等の利益相反関係を開示しなければならない。

16. 校正

掲載直前の最終校正は著者校正とするが、その際、大幅な追加、削除は認めない。

17. 別刷り

- 1) 発注は10部単位とし、製作費の実費を支払う。
- 2) 注文は著者校正時に行う。
- 3) 料金の支払いをもって発注完了とし、発注完了後1か月を目途に納品する。

18. 論文の著作権

本誌に掲載された著作物の著作権は、著者と日本救急救命学会の両者が保持するものとする。

19. 原稿の投稿方法

- 1) 論文投稿は電子媒体のみ受け付ける。
- 2) 著者は、図表入り完成原稿、図表ファイル(PDF形式以外)、誓約書(書式A)を本学会事務局に電子メールによって送付する。
- 3) COIの申告がある場合には、「投稿時COI(利益相反)申告書」(書式B)を合わせて送付する。
- 4) 著者は査読結果が通知された後、論文に修正が必要な場合は、1ヶ月以内に修正した論文、および査読コメントの回答文を返信する。
- 5) 著者は採択後の校正作業を1ヶ月以内に行う。



学会オフィシャルサイトでは以下のドキュメントをダウンロードいただけます

日本病院前救急救命学会
オフィシャルサイト
<https://www.jsels.com>



【誓約書・COI申告様式】

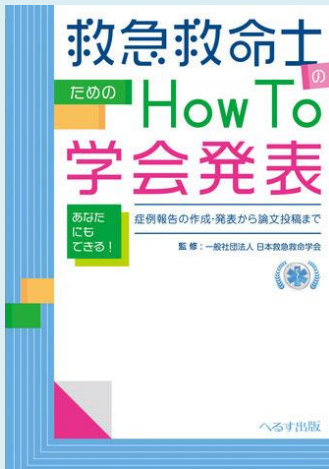
誓約書、および申告するCOIがある場合はCOI申告書をご記入ください。

【投稿論文の査読に関するループブリック】

査読者は投稿論文に対してこのループブリックの評価項目を元にして査読を行います。

【論文投稿の流れ】

論文を投稿された際の採択までの流れを示した資料です。ご参考にしてください。



学会で発表をしてみたい、でも何から手をつけてよいかわからない…。そんな救急救命士のために、テーマの見つけ方をはじめ、抄録や原稿の書き方、スライドの作成、学会での発表、さらに論文投稿までを実践できるような、救急救命士の学会である日本救急救命学会の執筆陣が手ほどきします。

本学会はこれから研究や論文執筆に取り組みたいと考える救急救命士の方を、何らかの形でサポートしていく学会へと進化していきます。そのための第一弾です。

救急隊員としての救急救命士がよく経験する、「症例検討会」での発表をきっかけにして、プレゼンテーションの質を高め、研究会や学会発表というステップを踏んでいけるよう、症例報告を中心に解説しています。ぜひ、手に取っていただいて、症例報告や研究の第一歩を踏み出すためのきっかけにしてください。

これまで、独学で取り組んでこられた方にも、きっと新しい気づきがある一冊です。

★コンパクトなA5判ながら写真や図表を多く取り入れ読みやすい！★実務的な部分について、経験者の目線から具体的に解説！★検定方法の解説などでは、そのまま代入して利用できるよう消防組織でなじみのあるデータサンプルで提示★スライド作りの解説では、Before Afterで例示したり、少しのアレンジですぐに転用できるデザイン集を掲載

－目次－

Chapter 1 学会発表と論文投稿の勧め

I 学会発表（症例を報告）することの意義、II 論文投稿の目的とは

Chapter 2 症例報告から始める研究発表

I 現場の疑問を研究上の疑問へ変える、II 先行研究を探る、III 研究倫理を知る

Chapter 3 症例報告の基本構成

I タイトル、II COI、III 背景、IV 目的、V 症例、VI 考察、VII 結論

Chapter 4 必要最低限の統計学

I 統計解析とは、II データの形式、III 記述統計 IV 推測統計1（仮説検定）、V 推測統計2（回帰分析）、VI Excel で実践、VII 仮説検定とP 値の誤解、Column バイアスって何？

Chapter 5 誰もが見やすいスライドの作り方

I 「シンプルデザイン」とは、II 骨子を作る III ベースデザインを決める、IV 配色を決める V シンプルデザインを考える、VI 各スライドを作る

Appendix▼グラフの用途とデザイン▼用途別スライドと資料の作り方

Chapter 6 学会発表に向けて

I 学会に入会する、II 口述発表、Appendix▼ポスター発表▼Web 会議システムでのセッション

Chapter 7 論文を投稿する

I 学会発表と論文投稿の違い、II 論文投稿先を決める、III 査読とは、IV 論文を書くポイント

定価 1,980円（税込）

監修：一般社団法人日本救急救命学会

第1版・A5判・136ページ・並製

発行年月：2022年1月

ISBN 978-4-86719-032-6



編集後記

令和3年12月、日本病院前救急救命学会の名称が変更されました。救急救命士が活躍する場が病院内にも広がったということが大きなきっかけとなりました。救急救命士がこの世に誕生して、様々な転換点がありました。それは主に特定行為の処置拡大ばかりでしたが、その時々で市民の期待を裏切れないという強い覚悟を抱きました。今回の法改正による就業場所の拡大についても、院内で働く救急救命士はもちろんのこと、救急隊として乗務する救急救命士にとってもシームレスで充実した救急医療の連携をしなければならないという覚悟を抱いたことだと思います。▷「救急救命士のための How To 学会発表」という本が学会監修のもと発売されました。同じようなコンセプトの成書は研修医や看護師向けにたくさん世に出ています。しかし、救急救命士向けのものはわずかしかありません。我々の学会は救急救命士による自律した学問構築を目標にしています。そのためにも、学会員を研究者として導くツールがまず必要だと認識しました。今後は、このツールを生かしたワークショップや、さらに発展した内容の書籍を送り出せるよう挑戦していきます。学会名称の変更は、皆さんの期待を裏切らないという覚悟を抱いた出発点です。これからもよろしくお願ひします。（T.Ichiryu）